

6.2 河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは私たちにとって馴染み深い昆虫類の確認状況や、水域と陸域との接点である水際域に特徴的な種の確認状況を整理しました。なお、前回、前々回調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、移動性の高い種や、限られた季節にしか見られない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、全国的な傾向を把握するための参考です。

【ゲンジボタルとヘイケボタルの確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

● ゲンジボタルを 11 河川、ヘイケボタルを 8 河川で確認

ゲンジボタルは、今回調査では、東北地方 1 河川、北陸地方 1 河川、中部地方 1 河川、近畿地方 2 河川、中国地方 2 河川、四国地方 1 河川および九州地方 3 河川の計 11 河川で確認され、前回調査の 9 河川よりも確認された河川数が増えました。

一方、ヘイケボタルについては、今回調査では、北海道地方、東北地方、中部地方、及び四国地方で各 1 河川、中国地方及び九州地方で各 2 河川の計 8 河川で確認され、前回調査の 3 河川よりも確認された河川数が増加しています。

なお、東北地方の米代川、中部地方の櫛田川、中国地方の高津川と高梁川、四国地方の渡川、九州地方の松浦川と番匠川の 7 河川では両種とも確認されました。

両種ともこれまでの調査では、確認河川数が最も多い結果となりました。

(資料掲載: 6-7~6-8、6-43 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 25 河川)

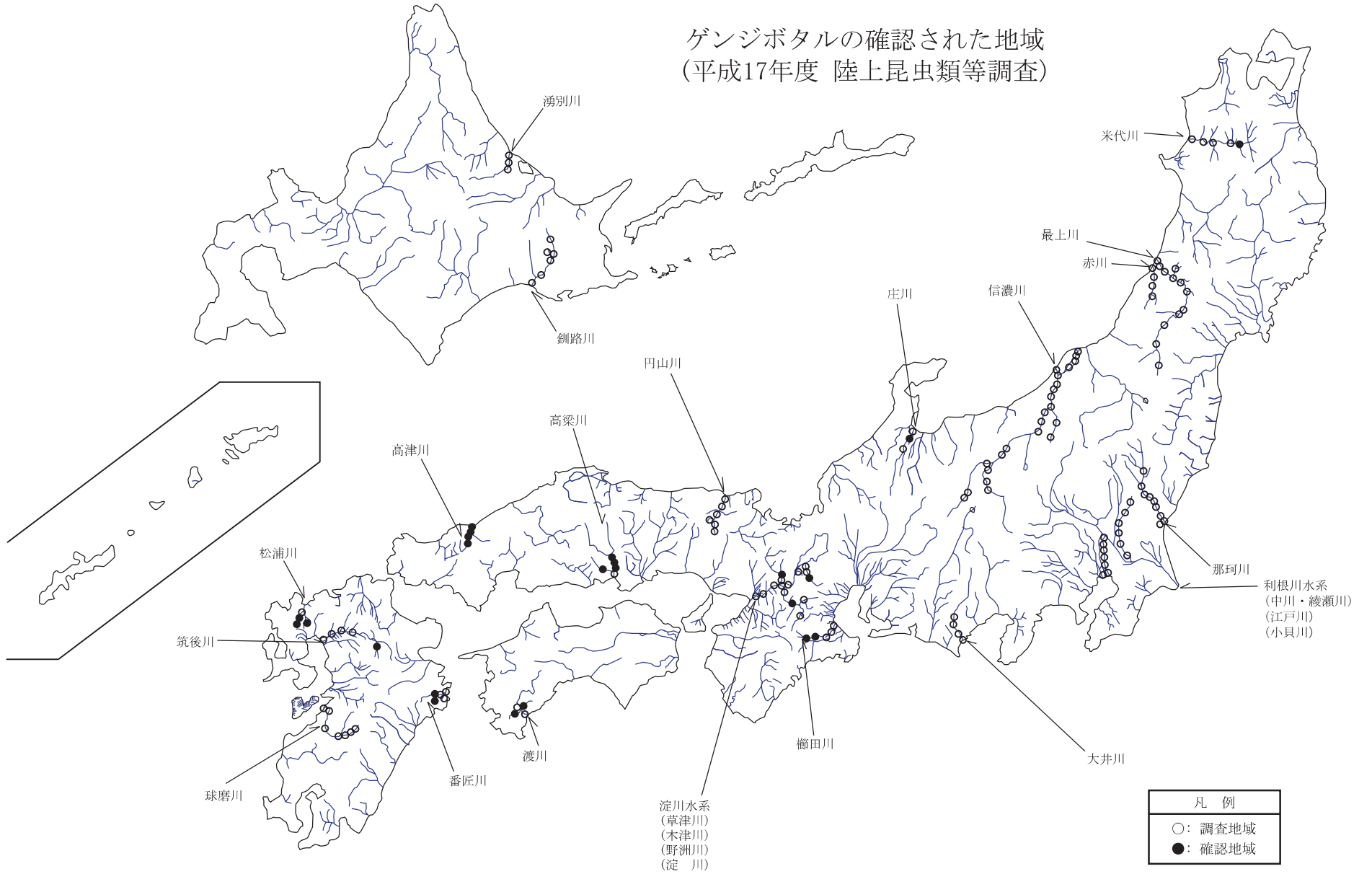
種類	前々回調査	前回調査	今回調査
ゲンジボタル	8 河川	9 河川	11 河川
ヘイケボタル	7 河川	3 河川	8 河川

日本には 40 種あまりのホタルが生息しますが、幼虫が水中生活をする種はゲンジボタル、ヘイケボタルおよびクメジマボタルの 3 種だけで、世界的にも珍しい生態を持つ種類です。

ゲンジボタルとヘイケボタルは全国的 (ゲンジボタルは北海道を除く) に生息していますが、ゲンジボタルが主に山地の清流などに生息するのに対し、ヘイケボタルはより流れの緩やかな小川や用水路など平地や丘陵地を主な生息場とする傾向がみられます。

ホタルは古くから初夏の風物詩として親しまれており、とくにゲンジボタルは各地で飼育や放流が行われています。しかしながら、本種においては発光のパターンや産卵習性のほか、遺伝子レベルでも顕著な地理的な変異が認められており、地域を越えた安易な放流は、遺伝的な多様性の喪失や生態系へ影響が懸念されます。

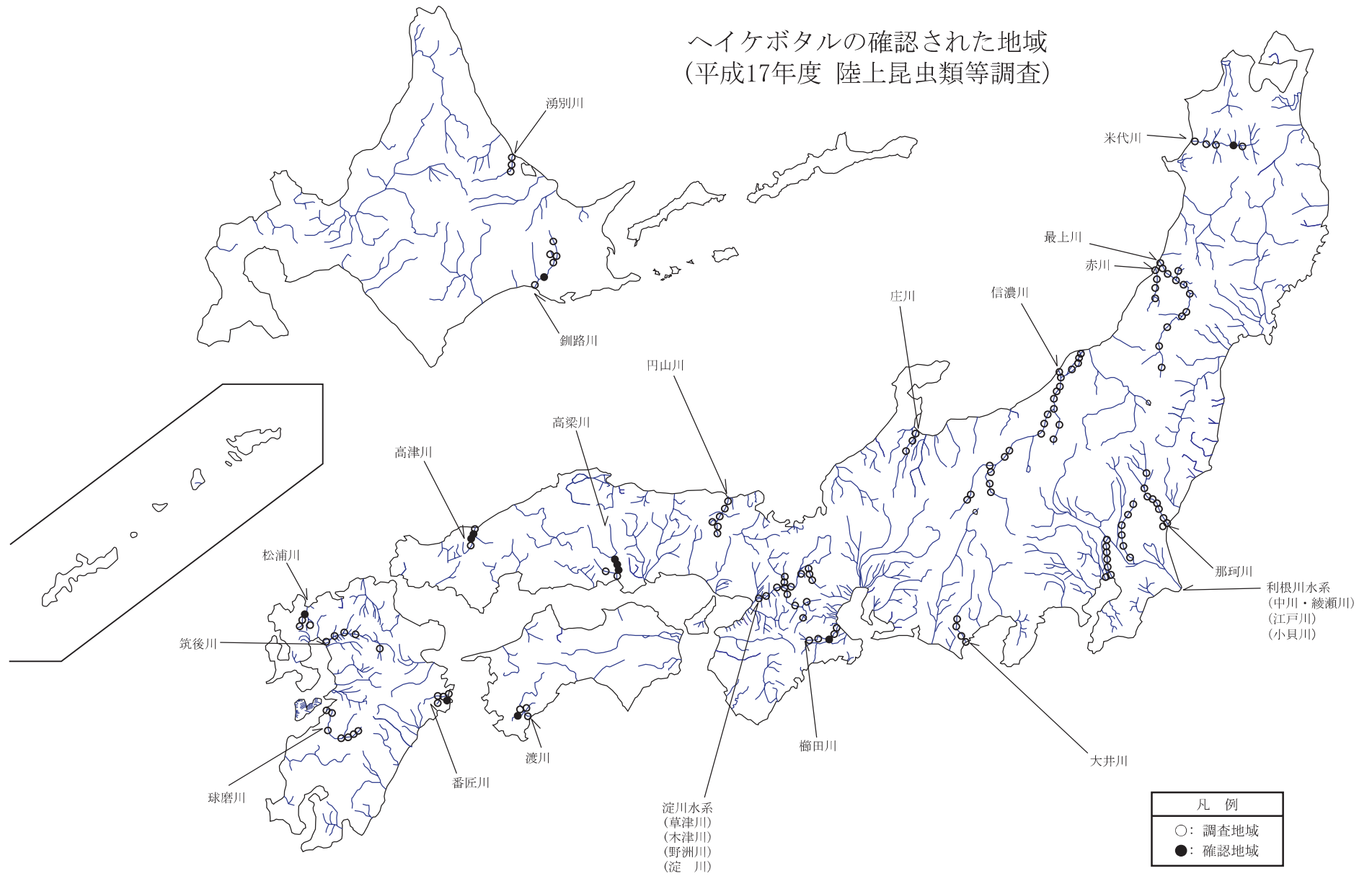
ゲンジボタルの確認された地域
(平成17年度 陸上昆虫類等調査)



凡 例	
○	調査地域
●	確認地域

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

ヘイケボタルの確認された地域 (平成17年度 陸上昆虫類等調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

【オオムラサキの確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

• オオムラサキを 4 河川で確認

オオムラサキは、今回調査では、関東地方の那珂川、小貝川、北陸地方の信濃川、九州地方の筑後川の 4 河川で確認されました。那珂川、小貝川は前々回調査、前回調査にひき続いての確認、筑後川では初めての確認となります。

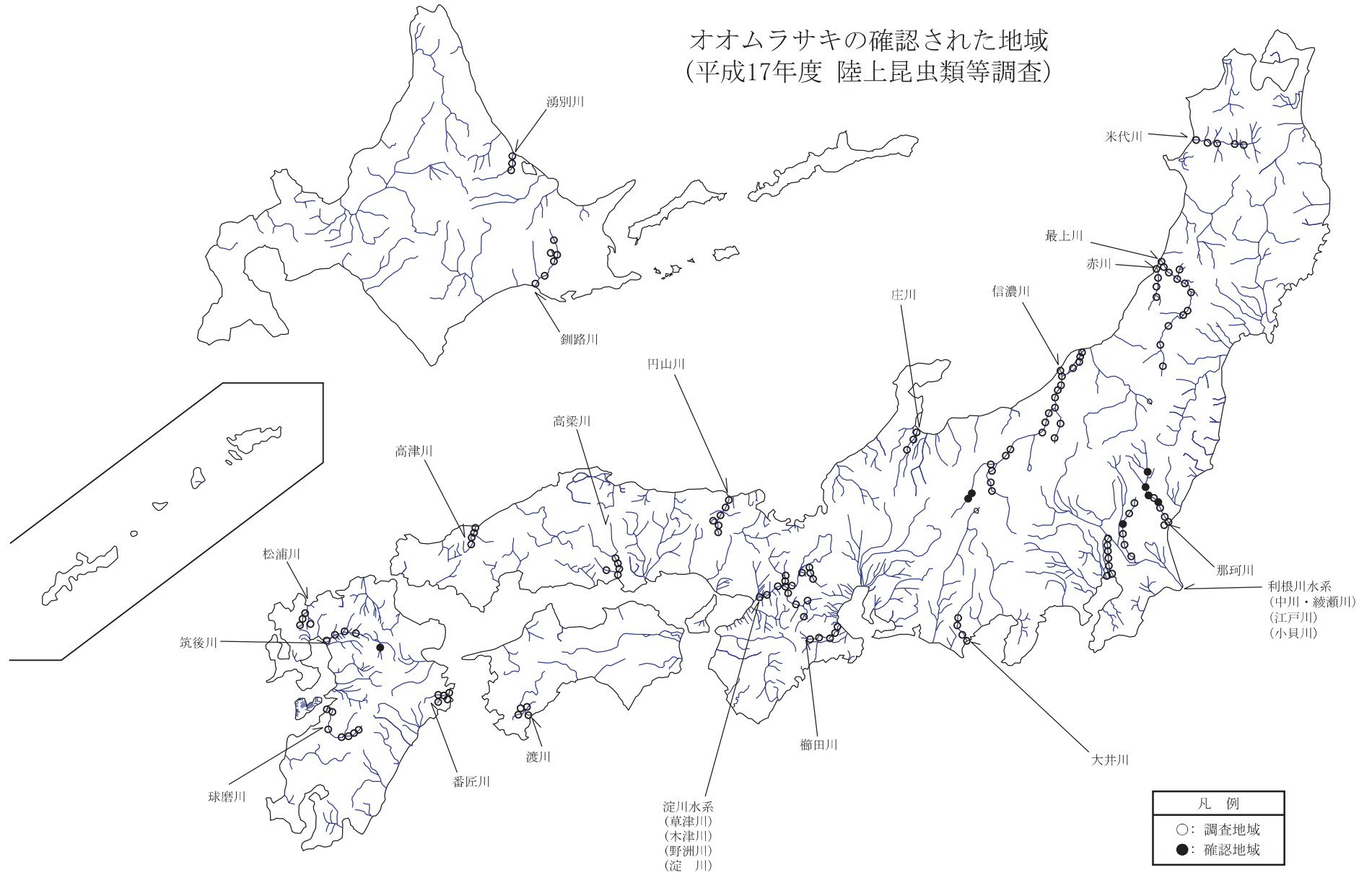
(資料掲載: 6-10、6-43 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 25 河川)

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
オオムラサキ	2 河川	3 河川	4 河川

オオムラサキは大型のタテハチョウで、北海道南西部から九州までの広い範囲に分布しており、日本の国蝶としても有名です。幼虫は河畔林を形成することの多いエノキやエゾエノキを食樹としています。成虫は初夏に出現し、クヌギやコナラなどの樹液、熟した果実等に集まります。雑木林などの生息環境の減少による本種への影響が懸念され、環境省のレッドデータブックでは準絶滅危惧に指定されています。

オオムラサキの確認された地域 (平成17年度 陸上昆虫類等調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

【コオニヤンマの確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

• コオニヤンマを 13 河川で確認

コオニヤンマは、今回調査では、東北地方から九州地方にかけての 13 河川で確認され、前回調査の 10 河川よりも確認された河川数が多くなりました。東北地方の赤川では初めての確認となりました。

(資料掲載: 6-12、6-43 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 25 河川)

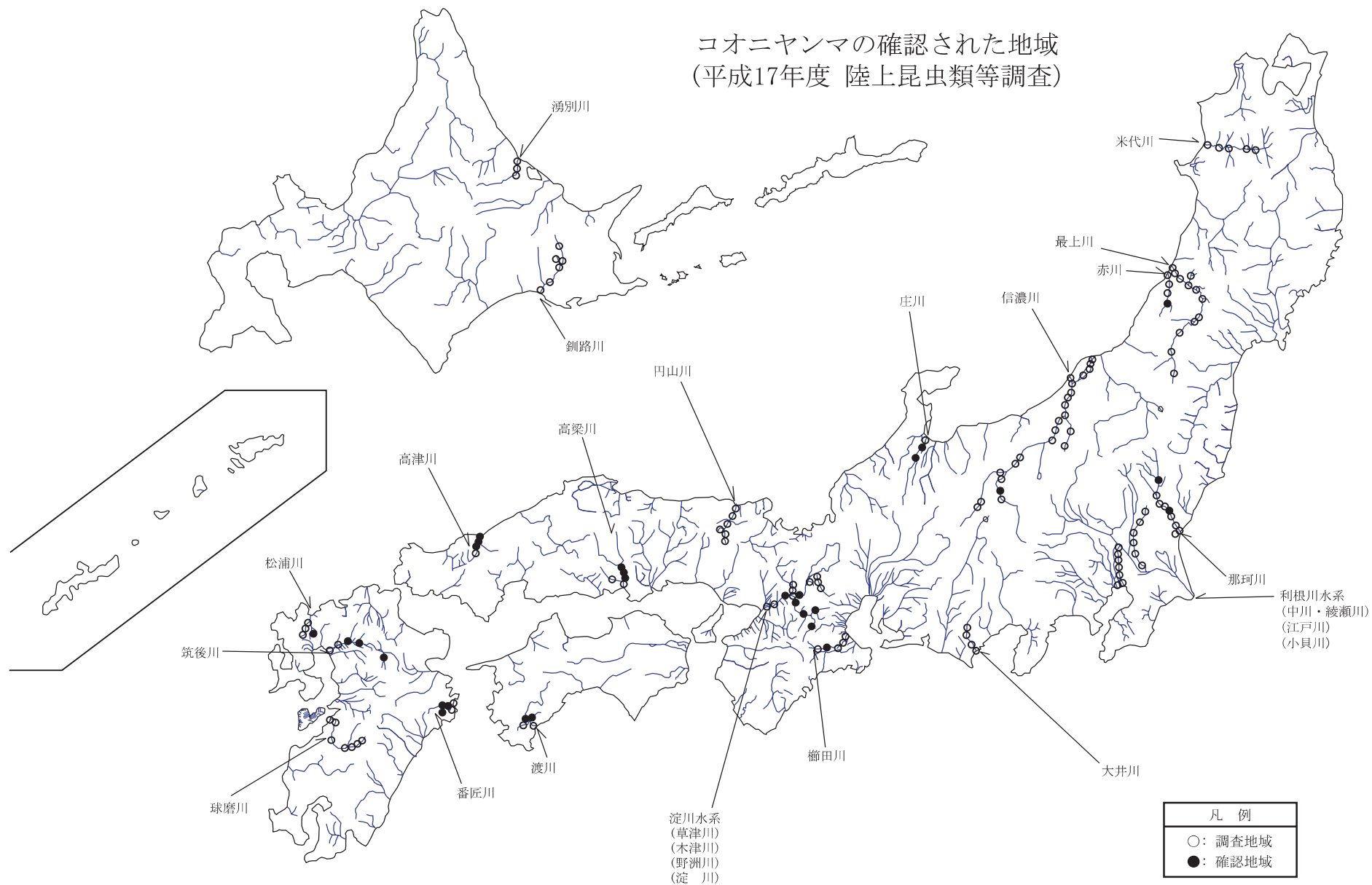
種類	前々回調査	前回調査	今回調査
コオニヤンマ	9 河川	10 河川	13 河川

コオニヤンマは、国内では最大のサナエトンボ類で、各地の平地から山地の河川に広範に生息する種です。生息には、浅瀬や流れの緩やかな砂泥底、水際の植物などの環境条件が必要です。大きな体長に比較して小さな頭部と長い後脚を持つ形態的な特徴があります。

コオニヤンマは底生動物調査でも確認されていますが、対比のために、ここでは陸上昆虫等調査結果のみを取り扱いました。調査事例は、底生動物調査においてより多くの河川で出現していることから、幼虫期の確認が効率がよいと考えられます。

コオニヤンマの確認された地域 (平成17年度 陸上昆虫類等調査)

6-12



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

【ヒヌマイトトンボの確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

- **ヒヌマイトトンボを 2 河川で確認**

ヒヌマイトトンボは、今回調査では、関東地方の利根川水系江戸川、近畿地方の円山川の計 2 河川から確認されました。両河川ともに前々回調査、前回調査に引き続いての確認となりました。

(資料掲載: 6-14、6-43 ページ)

確認河川数の比較 (対象河川: 25 河川)

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
ヒヌマイトトンボ	3 河川	2 河川	2 河川

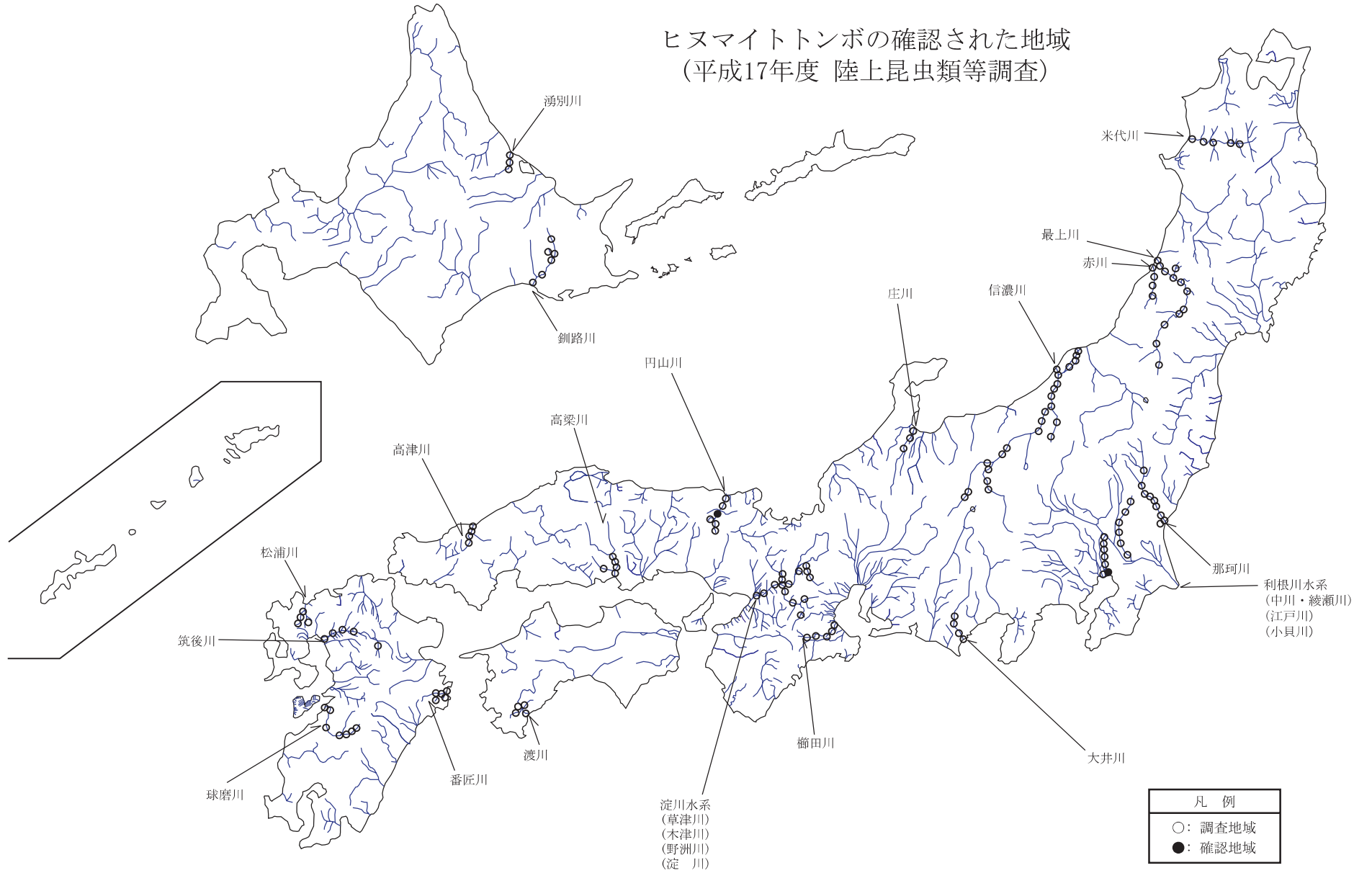
本種は本州の主に太平洋岸の大河の河口部周辺に分布し、ヨシやマコモなどの挺水植物が繁茂する汽水域が生息域です。

本種が主に生息する河口域は、塩水と淡水の微妙なバランスにより維持されている汽水域と呼ばれる環境である一方、改修や埋め立て、船舶の往来など人間活動による干渉を強く受ける場所でもあります。

本種は、近年分布域が限られてきており、開発工事などの影響が懸念されることから、今後の生息状況の変化を監視していく必要があります。

環境省のレッドデータブックにおいて、絶滅危惧 I 類に指定されています。

ヒノマイトトンボの確認された地域
(平成17年度 陸上昆虫類等調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

【砂礫河原に特有な群落に生息する種の確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

● カワラバッタを 7 河川で確認

砂礫河原に特有な群落に生息するカワラバッタ、カワラハンミョウ、ミヤマシジミ、ツマグロキチョウ、アオモンギンセダカモクメ、ギンモンセダカモクメ、ダイセンセダカモクメ、ヨツボシアカツツハムシ、ウスグロスジツツハムシの確認状況を整理しました。

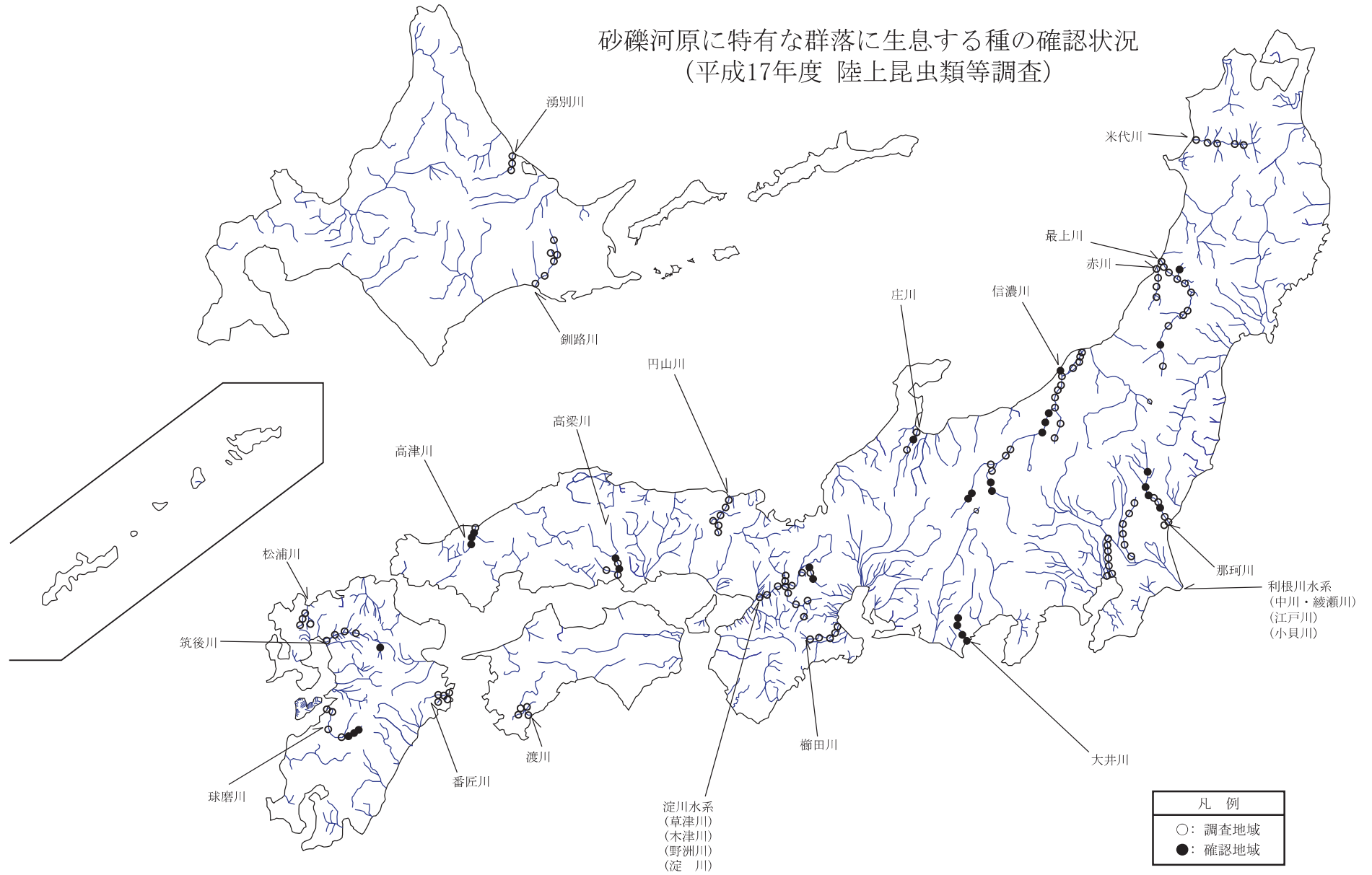
今回調査では、カワラバッタが 7 河川で確認されたほかは、ツマグロキチョウが 6 河川、ヨツボシアカツツハムシが 4 河川、カワラハンミョウ、ミヤマシジミ、ウスグロスジツツハムシがそれぞれ 1 河川で確認されました。河川別に見ると、北陸地方の信濃川が最も多く出現しており、9 種のうち 5 種が確認されました。

(資料掲載 : 6-16、6-44 ページ)

砂礫河原に特有な群落に生息する 9 種の分布状況から、砂礫河原の発達と分布状況を把握することを目的としました。カワラバッタ、ツマグロキチョウ、ヨツボシアカツツハムシ以外の種ではいずれも確認頻度は低く、アオモンギンセダカモクメ、ギンモンセダカモクメ、ダイセンセダカモクメの 3 種は今回調査では確認されませんでした。

砂礫河原に特有な植物群落は、自然状態では洪水等の攪乱を受けやすい不安定な場所に多く成立する群落ですが、年々、河川整備が進み、河床環境が安定してきたことから、自然の攪乱を受ける砂礫河原を中心とした生息環境が減少するとともに、対象種も減少してきていることが考えられます。

砂礫河原に特有な群落に生息する種の確認状況 (平成17年度 陸上昆虫類等調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

【湿生群落に特有な種の確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

● **フタモンクビナガゴミムシを 20 河川で確認**

湿生群落に特有な種であるエサキアメンボ、アオヘリホソゴミムシ、フタモンクビナガゴミムシ、ババヒメテントウ、ムモンチャイロテントウ、ヤマトヒメメダカカッコウムシ、ワタラセミズギワアリモドキ、シロツトガ、ヨシツトガ、ヨシカレハ、キスジウスキヨトウ、オオチャバネヨトウの確認状況を整理しました。

これらの湿生群落を生活の場としている昆虫類の出現河川数を種別にみると、フタモンクビナガゴミムシが 20 河川と最も多くの河川で確認され、次いでババヒメテントウとヨシツトガが 18 河川、アオヘリホソゴミムシが 17 河川で確認されました。

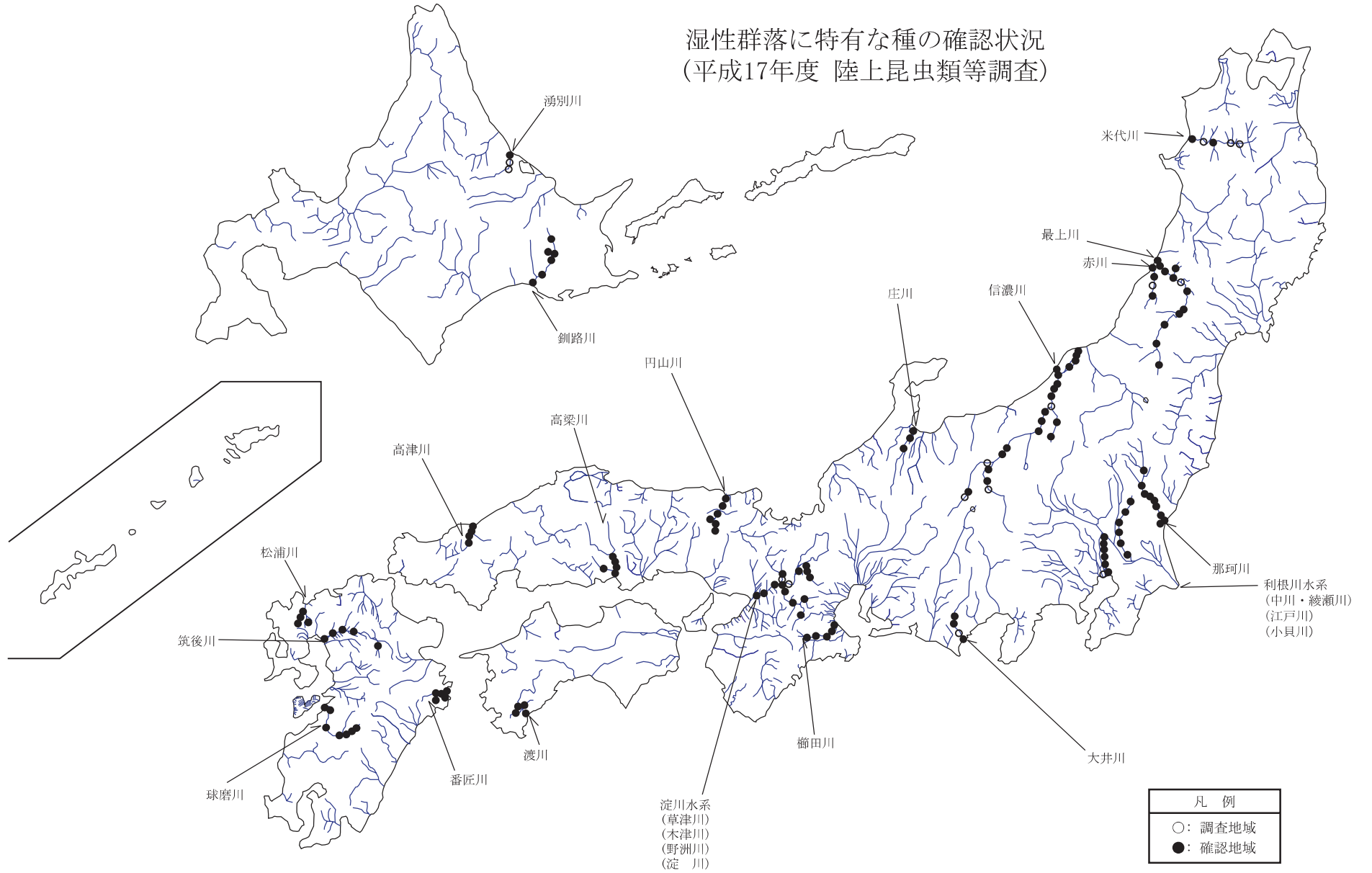
(資料掲載：6-18、6-45 ページ)

ヨシやガマを代表とする湿生群落に特有な 12 種について確認状況を整理し、湿生群落の広がりや健全性の把握を試みる材料としました。

種別では主にヨシ群落に生息するフタモンクビナガゴミムシが最も多くの河川で出現し、今回とりまとめを行った 25 河川のうち 8 割の 20 河川から確認されました。一方で、エサキアメンボならびにムモンチャイロテントウ、ワタラセミズギワアリモドキ、キスジウスキヨトウ、オオチャバネヨトウはそれぞれ 1 河川のみからの確認でした。

ガマ属を主な食草とするガ類では、シロツトガが 10 河川と比較的多くの河川から確認されたものの、キスジウスキヨトウは釧路川、オオチャバネヨトウは那珂川と、ともに 1 河川のみの確認でした。

湿性群落特有な種の確認状況 (平成17年度 陸上昆虫類等調査)



【河畔林に特有な種の確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

- **コムラサキを 20 河川で確認**

河畔林に特有なオオムラサキ、ゴマダラチョウ、コムラサキ、ミドリシジミ、オナガミズアオ、ヤマトタマムシ、ヒシモンナガタマムシ、ヤナギハムシ、ハンノキハムシ、ハンノキカミキリの確認状況を整理しました。

これらの河畔林を生活の場としている昆虫類の出現種数を河川別にみると、関東地方の利根川水系小貝川及び北陸地方の信濃川において 7 種と多く確認されています。

種別ではヤナギ類を食草とするコムラサキが東北地方から九州地方まで広く出現し、**20 河川**から確認されました。

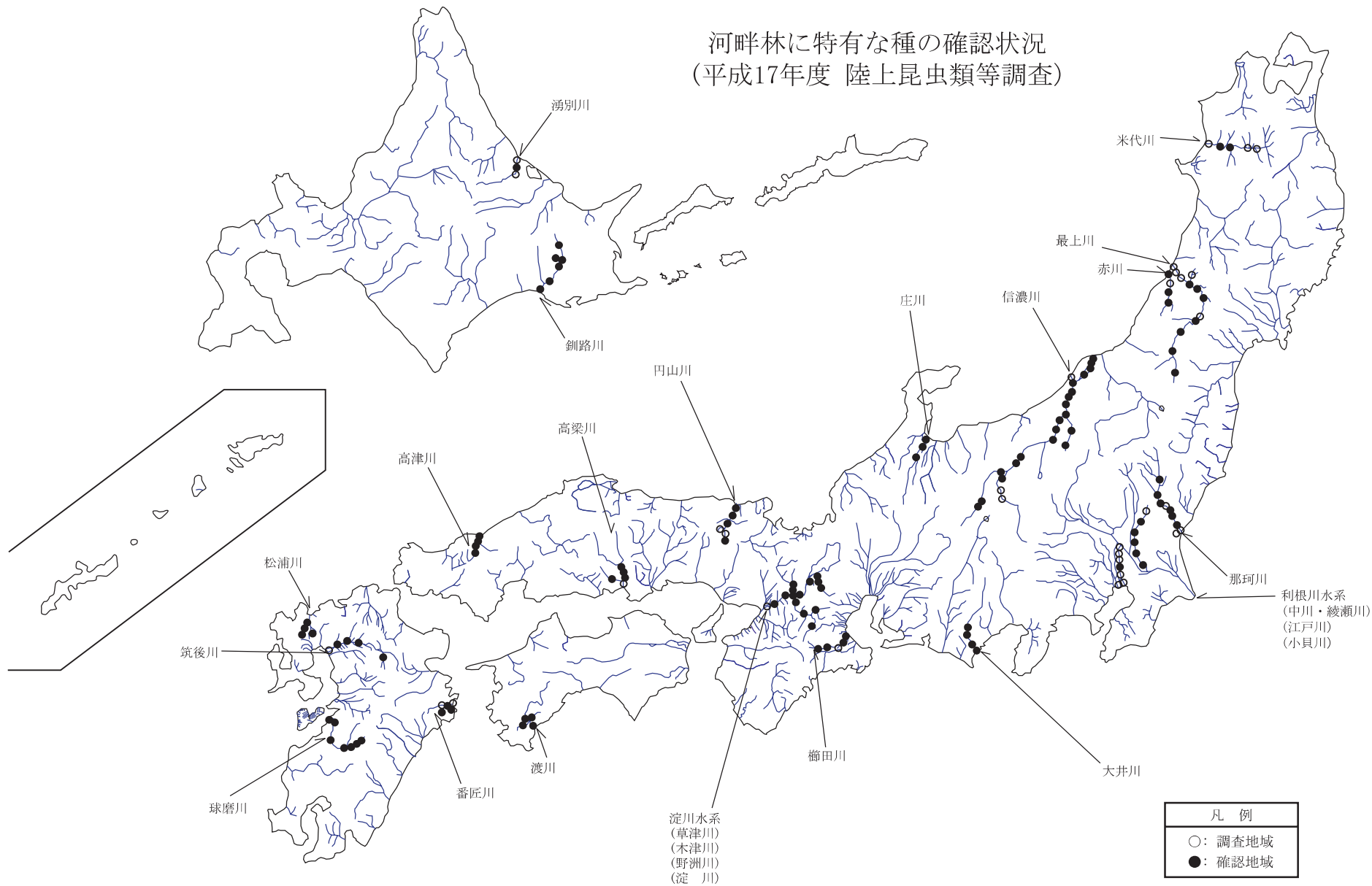
(資料掲載：6-20、6-46 ページ)

河畔林（エノキ群落やムクノキ群落、ヤナギ群落、ハンノキ群落など）に特有な **10 種**の昆虫類の確認状況から、河畔林の発達状況や良好さの検討を試みました。今回とりまとめを行った **25 河川**のうち、確認河川数が多かった種は、コムラサキの **20 河川**、次いでゴマダラチョウの **17 河川**、ヤナギハムシの **16 河川**でした。

近年、各地で外来種であるハリエンジュが河川敷に侵入し、これらの自然植生である河畔林がハリエンジュ群落に置き換わる事例が増加しています。今後もハリエンジュ群落の拡大による植生の多様性及び群落内の種多様性の低下が懸念されることから、分布動態を把握するためのモニタリングが必要と考えられます。

河畔林に特有な種の確認状況
(平成17年度 陸上昆虫類等調査)

6-20



【竹林に特有な種の確認状況】

(陸上昆虫類等調査)

- **ベニカミキリを 13 河川で確認**

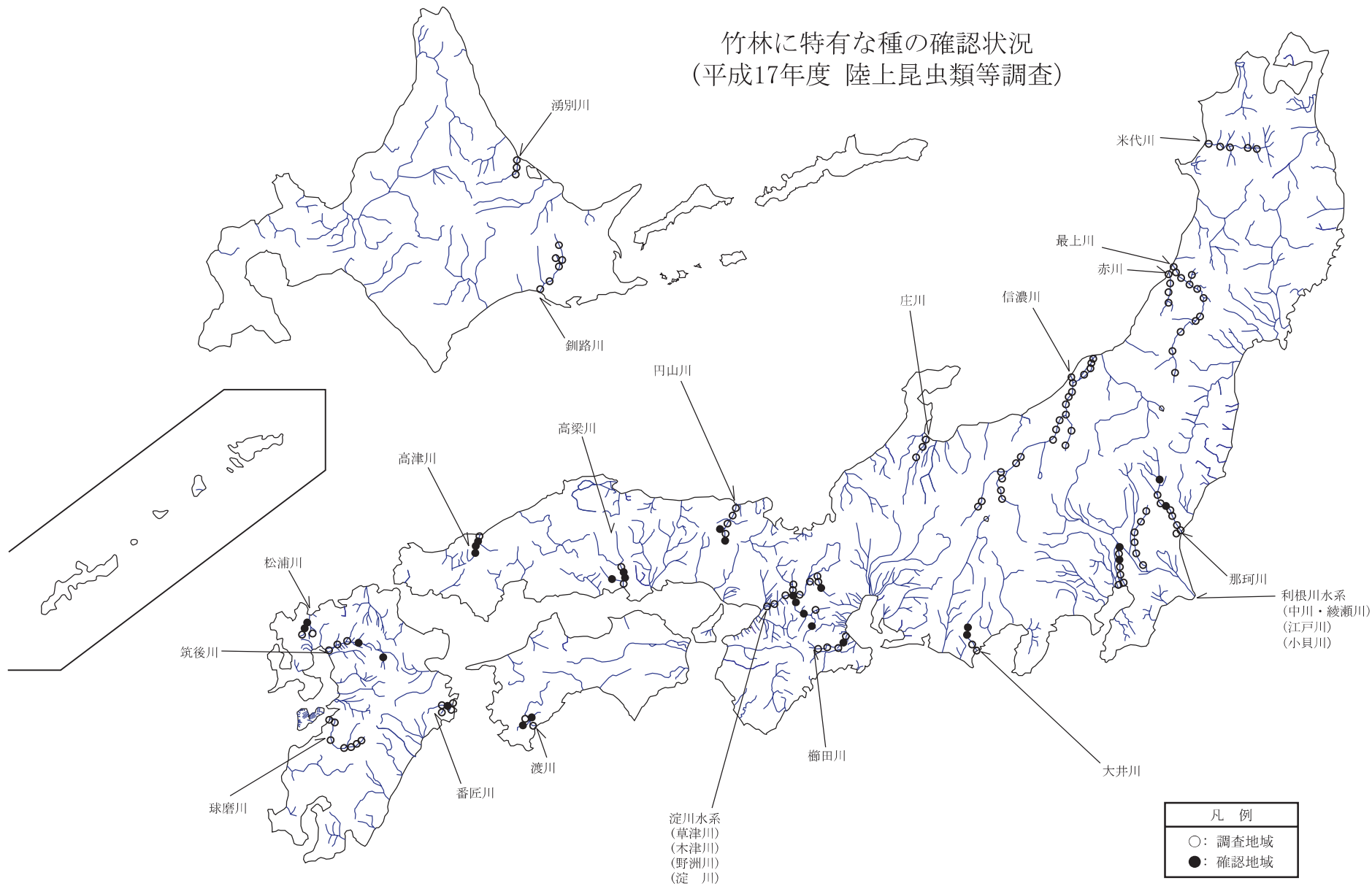
竹林に特有なタケカレハ、ベニカミキリおよびタケトラカミキリの確認状況を整理しました。種別では、タケカレハが関東地方から四国地方にかけての 7 河川、ベニカミキリが関東地方から九州地方にかけての 13 河川、タケトラカミキリは近畿地方及び九州地方の 3 河川で確認されました。

(資料掲載：6-22、6-47 ページ)

竹林（マダケ、モウソウチク、ハチク）に特有な 3 種の昆虫類の確認状況から、竹林の広がりや良好さの把握を試みました。

一般的に竹林は関東以西において発達した群落を形成していると言われており、今回調査ではそれを反映するように、北海道地方ならびに東北地方、北陸地方からは確認されませんでした。

竹林に特有な種の確認状況 (平成17年度 陸上昆虫類等調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。